

# 服飾配色の選択に対する傾向性について

平 田 定 子

## 1. 緒 言

ヨーロッパの服装は国際服として、日本女性の衣生活の中に定着し、70年は本格的な既製服時代に入ろうとしている。このような、時代的傾向から、私達が、日本人のためのモードとして考える時点で、どのような生産法式、或は又、着装に於いての自己開発を持すべきであろうか。体型によるパターンの研究は、進められてきたが、顔や髪の色彩などに対しての適切な研究はどうであろうか。今回は、その上にたつて、日本人の顔色について、服飾配色の選択に対する傾向性に於いての考察を試み、服飾デザインに対し、一つの指針を導き出したいと考える。

## 2. 調 査 法

1970年、1月、中国短期大学及び平田デザインスクール、女子学生183名に対し、アンケート法式によって、服飾配色に対する傾向性を、選択、嗜好傾向表、及び嗜好頻度表に作製し、SD法式によるプロフィール表を作製した。その中より、顔色、髪色などの関係に留意して選択する対象層を抽出して、日本工業規格 JISZ 8721 に準拠して、Mansellcolor により、顔色と、着衣の比較実測調査を行い、各種配色論に基づく考察を加えた。

## 3. 結果及び考察

表1、表2、服飾配色選択傾向について見ると、①流行色に関心があるかについては、ややあるが46.4%、かなりあるが30.6%と、②流行色を取入れているかについては、やや取入れているが57.4%と過半数をしめ、流行について関心を持ち、それを取入れていることがわかる。③嗜好色があるかについては、かなりあるが57.4%、ややあるが27.2%と、④嗜好色を取入れているかについても、かなり取入れているが62.3%、嗜好色を取入れないは0と、流行色についてよりも、かなりウェイトが高く个性的であることを示している。⑤顔色や髪の色と流行色や嗜好色を考えて選ぶかについては、かなり考えるが38.9%、非常に考えるが18.6%と、⑥考えるべきだと思うかについては、非常に考えるべきだと答えた者が一番多く39.9%と、理性的に色彩を選ぼうと思っている傾向がうかがえる。⑦体型を考えてについても同じく、かなり考える、非常に考えるが、これに続いており、自分の個性を知り、そして考えようとしている傾向が見られる。しかし⑧の顔色を気にして色を選ぶかについては、全く考えないが27.3%と最も多く、顔、髪色に対する流行色、

表1 服飾配色選択傾向

		1	2	3	4	5	計
		非常に	かなり	やや	どちらでもない	ない	
1	流行色に関心がある	15 (8.2)	56 (30.6)	85 (46.4)	15 (8.2)	12 (6.6)	183
2	流行色を取り入れているか	2 (1.1)	15 (8.2)	10.5 (57.4)	49 (26.8)	12 (6.6)	183
3	嗜好色がある	23 (12.6)	10.5 (57.4)	50 (27.2)	4 (2.2)	1 (0.6)	183
4	嗜好色を取り入れているか	22 (12.0)	114 (62.3)	39 (21.3)	8 (4.4)	0 (0)	183
5	顔色や髪の色と流行色や嗜好色を考えて選ぶか	34 (18.6)	71 (38.9)	29 (15.8)	20 (10.9)	9 (4.9)	183
6	顔色や髪の色と流行と配色とを考えに入れて調和を考えるべきだと思うか	73 (39.9)	50 (27.3)	47 (25.7)	8 (4.4)	5 (2.7)	183
7	体型を考えてモードや流行色や嗜好色を考えることがあるか	55 (30.6)	70 (38.3)	47 (25.7)	7 (3.8)	4 (2.2)	183
8	顔色を気にして色を選ぶか	15 (8.2)	31 (16.9)	49 (26.8)	38 (20.8)	50 (27.3)	183

( )内は%

表2 服飾配色選択傾向

		1	2	3	4	5
		非常に	かなり	やや	どちらでもない	ない
1	流行色に関心があるか			3.25		
2	流行色を取り入れているか			3.71		
3	嗜好色があるか		2.66			
4	嗜好色を取り入れているか		2.61			
5	顔色や髪の色と流行色や嗜好色を考えて選ぶか		2.82			
6	顔色や髪の色と流行色と配色とを考えに入れて調和を考えるべきだと思うか		2.38			
7	体型を考えてモードや流行色や嗜好色を考えることがあるか		2.53			
8	顔色を気にして色を選ぶか				3.94	

平均値

嗜好色等、全体的には気にしながら、顔の色は、それほど考えないということは、体型など、スタイル、パターンの関心よりは、顔色の色彩に対する関心の方がウェイトが低いということになる。着装時点で髪色や眼色、顔色を非常に問題にして選択する欧米の人達に対して、日本人は、共通の体質、民族性、習慣性と云う平均化された感情や感覚のためから来る。東洋人の顔色の個性に対する感覚が、きわめてとぼしい傾向と見ることができる。

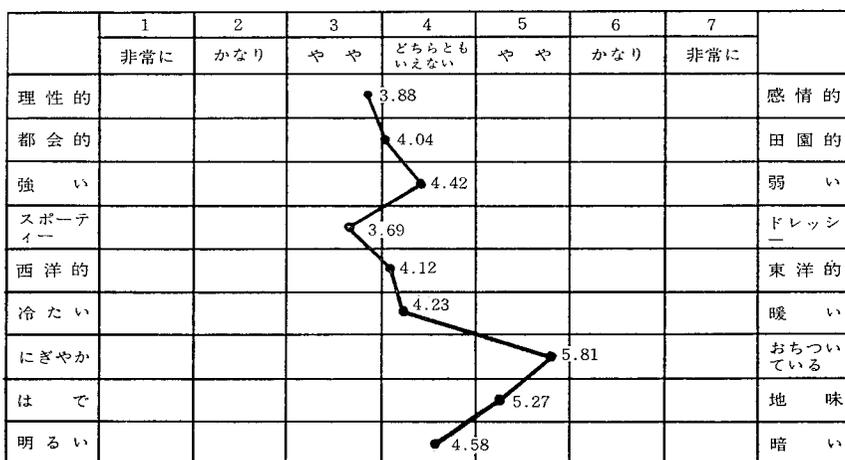
表3, 表4の嗜好色傾向について見ると, 特徴としては, スポーティに於て, SD調査のプロファイルで, 3.69の位置に平均値があり, スポーティなイメージを好ましいとする傾向が一番強い。次に, やや落付いている, やや地味なものを好ましいとしながら, 都会的, 西洋的なものを好ましいとする傾向がみられる。落付いて, 地味なものという傾向は, 調査場所が学内で, 問題も漠然としていたことや, 対象が地域的に固定していると云う点による結果とも考えられる。

表3 嗜好色傾向

	1	2	3	4	5	6	7		計
	非常に	かなり	やや	どちらとも いえない	やや	かなり	非常に		
理性的	9 (5.1)	34 (19.1)	50 (29.0)	49 (28.0)	14 (8.0)	17 (9.5)	1 (0.5)	感情的	174
都会的	7 (4.0)	34 (19.1)	44 (25.3)	50 (29.0)	22 (12.6)	13 (7.4)	4 (2.8)	田園的	174
強い	6 (3.4)	21 (12.0)	34 (19.1)	62 (35.9)	34 (19.1)	14 (8.0)	3 (1.7)	弱い	174
スポー ティー	22 (12.6)	34 (19.1)	45 (25.6)	40 (22.9)	19 (10.9)	12 (6.7)	2 (1.1)	ドレス シー	174
西洋的	10 (5.7)	33 (19.5)	36 (20.6)	67 (38.2)	20 (11.3)	6 (3.4)	2 (1.1)	東洋的	174
冷たい	8 (4.5)	21 (12.0)	34 (19.1)	61 (35.0)	26 (14.9)	21 (12.0)	3 (1.7)	暖かい	174
にぎやか	0 (0)	3 (1.7)	13 (7.4)	25 (14.3)	57 (32.7)	56 (32.0)	20 (11.3)	おちつ いている	174
はで	0 (0)	5 (2.9)	18 (10.3)	50 (29.0)	51 (28.7)	29 (16.5)	21 (12.0)	地味	174
明るい	4 (2.8)	17 (9.5)	32 (18.3)	59 (33.3)	34 (19.1)	16 (9.1)	12 (6.7)	暗い	174

( )内は%

表4 嗜好色傾向



平均値

図1, 図2, 表5に於けるアンケートの嗜好色を見ると, Hue では, Nを除いては5Gが最も多く21.3%, 5Bが16.1%, 5Rが11.6%, YR系と続いている。Value では, 暗色が40.1%と多く, やや地味で, やや落付いた色を平均値とした, プロフィルと

図1 嗜好色 (Hue)

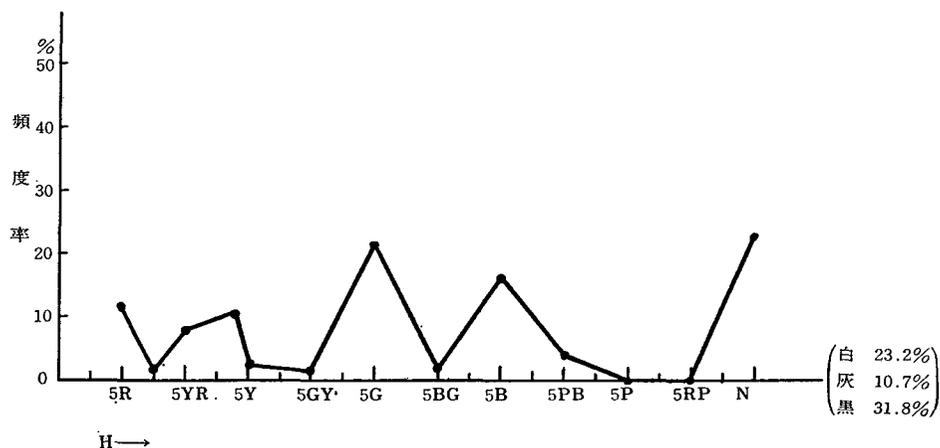
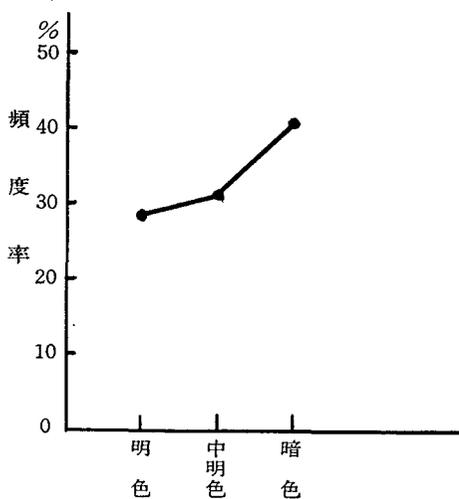


図2 嗜好色 (Value)



一致したわけであり, 5G, 5R, YR系の好みが多いのも, やや都会的, やや西洋的傾向に平均値が見られたように近代的であると思われる。

表5 嗜好色

	5R	10R	5YR	7.5YR	5Y	5GY	5G	5BG	5B	5PB	5P	5RP	N	計
明色	32 (33.7)	4 (4.2)	10 (10.5)	1 (1.1)	5 (5.2)	4 (4.2)	11 (11.6)		6 (6.3)				22 (23.2)	95 (28.9)
中明色	3 (2.9)	1 (0.9)	8 (7.9)	14 (13.4)	2 (1.9)		22 (21.6)		41 (40.2)				11 (10.7)	102 (31.0)
暗色	3 (2.3)		7 (5.3)	19 (14.4)		1 (0.7)	37 (28.0)	4 (3.0)	6 (4.6)	13 (9.9)			42 (31.8)	132 (40.1)
計	38 (11.6)	5 (1.5)	25 (7.6)	34 (10.3)	7 (2.1)	5 (1.5)	70 (21.3)	4 (1.2)	53 (16.1)	13 (3.9)			75 (22.8)	329

( )内は%

次に非常に、又はかなり、顔色と髪色と流行色や嗜好色を考えて選ぶと答えた解答者中、50人を対象に、着衣の色彩を測定したのが図3、図4、図5、表6である。(配色測

図3 着衣 (Hue)

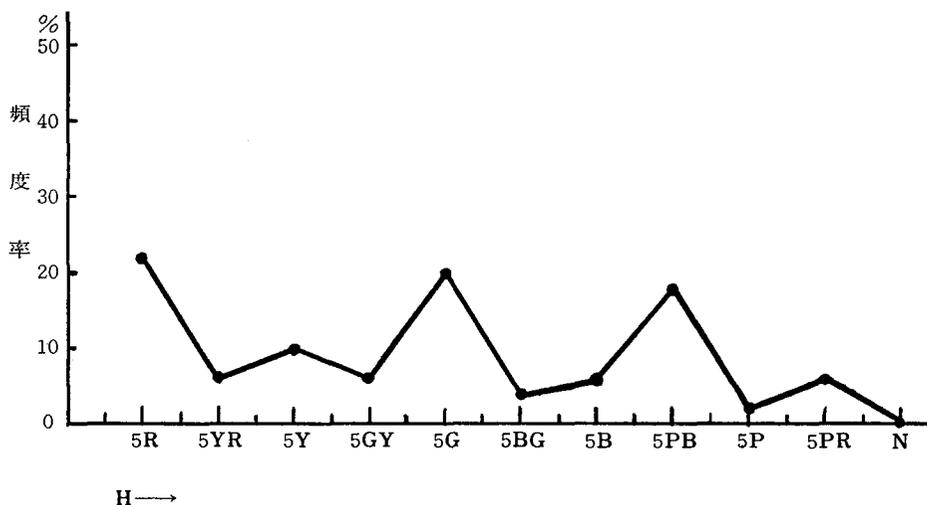
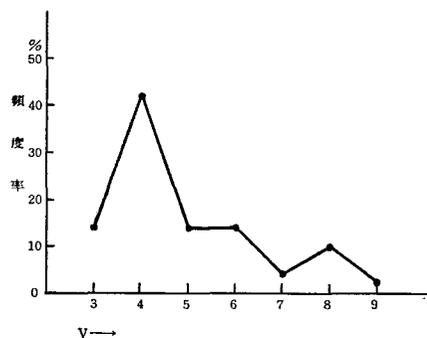


図4 着衣 (Value)



定上、特に無彩色は除いたことは了承された  
い) Hue では、5 Rが最も多く22%、次に  
5 Gが20%、5 P Bが18%と続いている。  
Value では、V 4が42%と高く、V 5が14  
%、V 6が14%と続いて中明度に、高い比率  
が見られる。Chroma では、C 4が24%、  
C 6が14%、C 5が12%と、比較的低彩度か  
ら、やや中彩度であるが、C 12が10%、C  
10が8%、C 14が8%など高彩度にも頻度

図5 着衣 (Chroma)

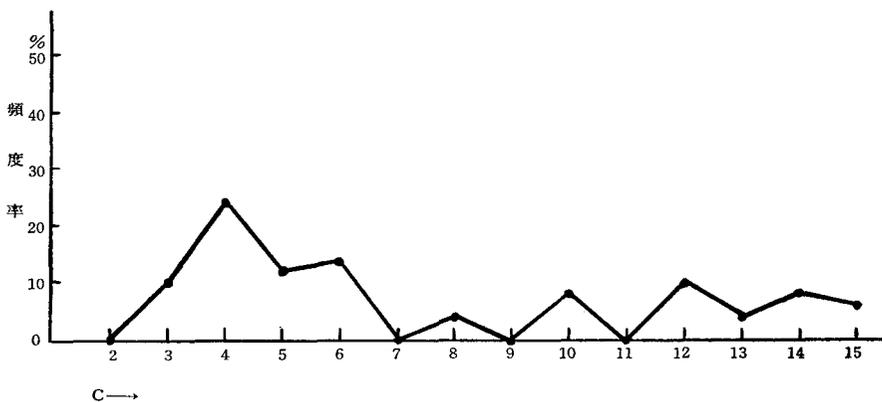


表6 着衣色

色相	R		Y R		Y		G Y		G		B G		B		P B		P		R P		
	5	7.5	10	5	10	2.5	7	10	1	7.5	2	10	7	10	2.5	5	7.5	5	7		
彩度	13	14	5	12	14	15	8	12	14	3	4	10	5	6	4	10	5	6	4	12	13
明度	3																				
	4	1		1	1																
	5			1	1																
	6																				
	7																				
	8																				
	9																				
	計	11		3		5		3		10		2		3		9		1		3	
	%	22.0		6.0		10.0		6.0		20.0		4.0		6.0		18.0		2.0		6.0	

が多い。これらを全体的に見ると、Hue では好みの色彩を着用していることがわかり、Value, Chroma から推察すると、スポーティなトーンが着用されており、嗜好傾向調査と一致した結果が現われていると考えられる。

表7は、非常に、又は、かなり顔色と髪色と流行色や嗜好色を気にして選ぶ解答者中、50人の顔色を測定したものである。10R系が、24%、2.5YR系が26%、5YR系が22%、7.5YR系が28%となっている。これを一般には、10R系をピンク系、2.5YR系、5YR系をナチュラル系、7.5YR系を黄色系としているが、Moon & Spencerの調和配色領域論、並びに田口柳三郎氏による、田口式調和配色論に基き、調和色の傾向性について考察すると、図6、10R系の顔色に於ける着衣については、10R.2.5G、5G、10BG、7.5B、2.5PBの6名は、快領域にあり、2.5GY、7.5GY、7.5RP、7.5Rの6名は、第1、第2の不快領域にある。図7の、顔色2.5YRに於いては、10YR、5G、5PB、5Rの4名は快領域にあり、5YR、7.5Y、10Y、7.5GY、5RP、7.5R、10Rの9名は不快領域にある。図8の、5YRの顔色では、2.5Y、10G、10B、7.5PB、5Pの8名は、快領域にあり、10YR、2.5G、10Rの3名は、不快領域になる。図9の、7.5YRの顔色では、7.5G、2.5BG、2.5PB、5PBの7名は快領域にあり、2.5Y、10Y、2.5G、5G、5RP、5Rの7名は、不快領域にある。総合的に見ると、快領域に近いものもあるが、顔色や髪色の関係に、留意しながらも、調査対象者の約半数は、不快領域を選んでいったことになる。

表7 顔 色

色相	R					Y R										計	%					
	10R					2.5 Y R					5 Y R							7.5 Y R				
彩度	4	5	6	7	8	4	5	6	7	8	4	5	6	7	8	4	5	6	7	8		
明 度	6							1											1	1	3名	6
	7	1		2		4							4			4		2			16名	32
	8	8		1		6	2				5	2				5				1	31名	62
小計	9	0	3	0	0	10	0	3	0	0	5	0	6	0	0	9	0	2	1	2		
%	18	0	6	0	0	20	0	6	0	0	10	0	12	0	0	18	0	4	2	4		
計	12名 (24%)					13名 (26%)					11名 (22%)					14名 (28%)					50名	

図6 顔色10R系

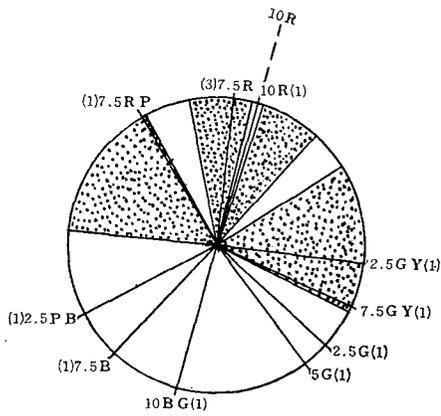


図7 顔色2.5YR系

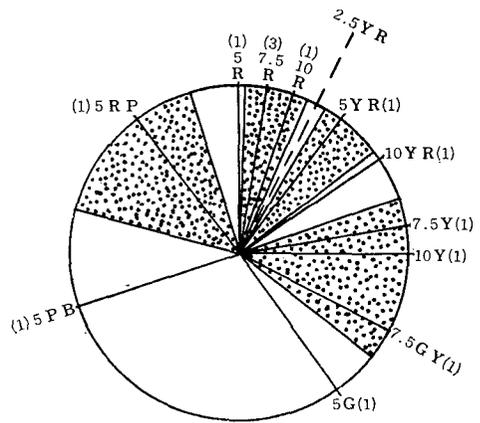


図8 顔色5YR系

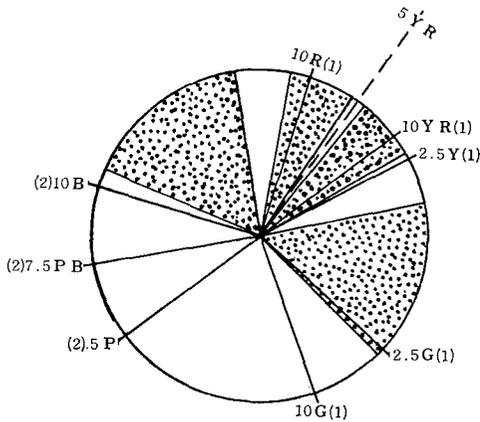
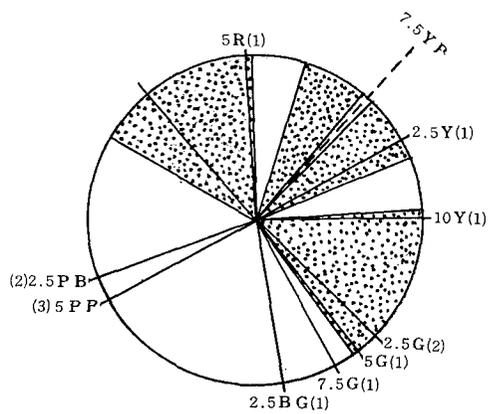


図9 顔色7.5YR系



この調査の結果、非常に、又はかなり顔色と髪色と嗜好色や流行色を考えて選ぶ対象者の抽出測定にもかかわらず、以上の考察の如く、不調和色を選んでいた者が多数であったことは、個人的な嗜好色の問題もあるが、やはり、洋装に於ける色彩への遅れがあると思われる。日本民族の過去に於いては、衣服の色は、地位や階級を表現するものであった。美しい色彩と、顔色との間に、白衿や、黒襦子の無彩色を置くことによって、見事な日本の美を持ったのではあるが、顔色に似合う色彩であるとか、個性の演出であったわけではなかったために、顔色など体質的色彩感覚の選び方が、非常にそれらを問題にする触覚的な欧米人に比較して、とぼしい原因と思われる。近年洋装の導入と共に、我々が、欧米風に模放して、毛染め、化粧による転身を美しいと錯視する情感にのみひたるならば、それは日本民族の体格的特徴を、無視するばかりでなく、我々の人間的の価値までも、放棄することになるのではないか。世界は国際的になり、人格的な本質の格差はあってはならないし、あるべきではないけれども、日本人の特徴を、体格、体質的に、より合理的、機能的に生かして行く建設的な姿勢をこそ、模放時代をこえて今後、服飾デザイン界、服飾業界、及び服飾関係教育者の研究されていかなければならない事であると考え。

#### 参 考 文 献

1. Munsell. A. H “Munsell Book of color” munsell color company.
2. 田口渕三郎 “色彩のすべて” 森脇文庫.
3. 宮下 孝雄 “基本配色学” 光生館.
4. 襷山 貞登 “デザインと心理学” 鹿島出版会
5. 池内 登 “園舎の色彩計画に関する色彩学的考察” 姫路短期大学研究報告第14号.
6. 立石 睦子 “生活科学化の中における衣服管理、Ⅱ被服と実生活との関連” 姫路短期大学研究報告第11号.
7. 石川 綾子 “日本女子洋装の源流と現代への展開” 家政教育